Keyword 記憶　記録　油彩　モノトーン

六十四瞬

表題経験や記憶から着想した残像の絵画化

芸術研究科 造形表現専攻
芸術表現領域 博士前期課程
2024年3月修了

梁瀬美桜子

主査 渡抜亮　**副査** Robert David Platt　国本泰英

研究背景

あたりまえという感覚さえももたないままに日々を過ごしてきた中で、「平凡なものや身近なものは永遠に続かないが続いてほしい」という、言葉では言い表すことができない日々の一瞬を、絵画という方法で視覚化したいと考えた。

研究目的

何気なく気にも留めないような身近なものを題材にしながら、年を重ねるごとに時が止まってほしいと哀願する思いが増える日々と、誰にも止めることができない時間を感じられるような場面を描くことが、築き上げてきた過去と向き合えるひとつの機会になるのではないかと考え制作した。記憶が保存可能な世の中になったからこそ、以前より価値が変わっているのではないかと考える。

研究概要

成果・まとめ

本研究では代わり映えのしない日々の一瞬と、曖昧ではあるけれど忘れていく確かな過去に構築された自分自身を表現しようと考えた。何気なく気にも留めない身近なものに目を向けるということは、変化していく自分自身を描くことに繋がると考える。印象深いものや人、強烈な思い出や経験だけをそのままで残すのではなく、あたりまえに忘れられていく生活に意識を向け目に見える形で表現することこそ、その人らしさを作り出す最も大きな要因になるのではないかと考える。今後の活動において、これまでに発見してきた多くの課題と向き合って地道に制作していきたい。

指導教員コメント

64枚の絵画が放つ、淡い記憶。確かなものが不確かなモノクロに変質していく過程と、価値に対する回顧を、梁瀬さんは油彩画のインスタレーションという方法を通じて見事に表している。かつて木枠に張られ、そして木枠から外され痕跡のみが残るキャンバス群は、我々鑑賞者の心模様の代弁者となっている。梁瀬さんが個として体験したものが、修了作品を通じて普遍的な繊細な作品へと帰結していると感じる作品である。

渡抜亮